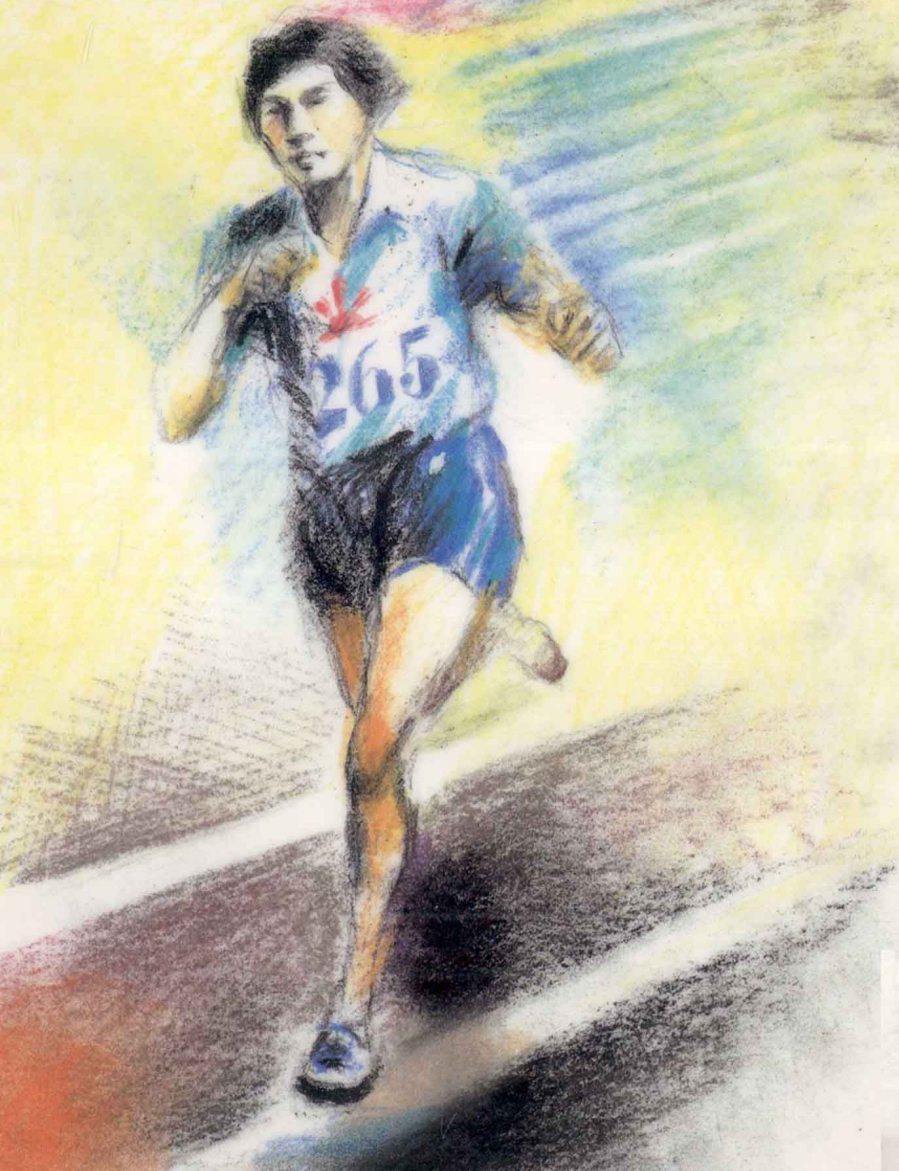
朝やけのランナー

みじかい人生を全力疾走した人見絹枝

真鍋和子・作　ささかしげる・絵



PHPこころのノンフィクション発刊のことば

このシリーズは、さまざまな分野で理想を追い求め、勇気と情熱をもって懸命に生きた人々の姿を、事実をもとに描くものです。私たちに人生のすばらしさを語り、生きることのよろこびを与えずにはおかない数々の魂の軌跡、それを、次代をになう子どもたちに広く伝えたいと念願しております。

真鍋和子
朝やけのランナー
PHP研究所　1984
160P　22cm
PHPこころのノンフィクション　28
NDC916　まなべ　かずこ

朝やけのランナー

1984年11月9日　第1版第1刷発行

著者　真鍋和子　画家　こさか　しげる
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
電話 075(681)4431
東京事務所 03(295)9211

印刷・製本　大日本印刷株式会社

© 1984 Kazuko Manabe & Shigeru Kosaka　Printed in Japan.
乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替えいたします。

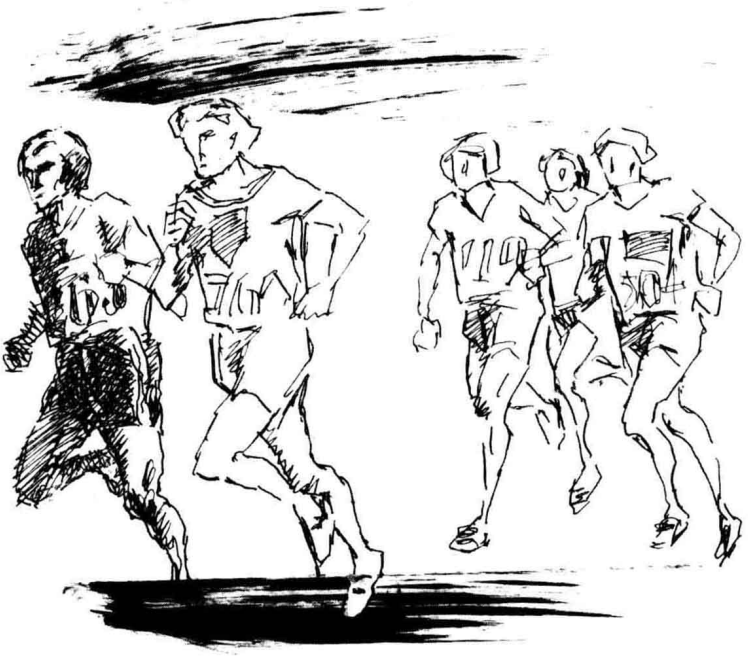
ISBN4-569-28268-7

朝やけのランナー

みじかい人生を全力疾走した人見絹枝

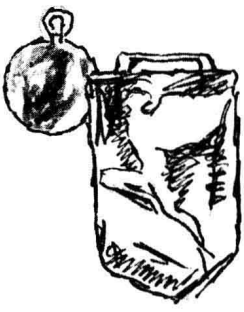
真鍋和子●作　こさかしげる●絵

もくじ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章 スパイクをはいて
おてんば娘……8
はじめての優勝……16
陸上選手への道……22



第二章 世界の舞台へ
出発……34
長い旅……39
眠れぬ夜……46
最後のジャンプ……53

第三章 〝死の激走〟
けん引車……66
百か八百か……70
アムステルダム……77
予期せぬ敗北……81
奇跡の銀メダル……88

第四章　はたされた約束
スパイクのカビ……97
プラハ目ざして……103
日本女性の代表……111
日本チーム結成……117

第五章　倒れるまで
プラハ大会……123
悔いなきたたかい……130
重圧……138
ゴールにはいる……144
あとがき……154

著者・**真鍋和子**（まなべ・かずこ）

1947年東京生まれ。清泉女子大学国文科卒業。日本児童文芸家協会，日本児童文学者協会，ノンフィクション児童文学の会会員。主な作品に『千本のえんとつ』（児童文芸新人賞受賞）『かまくらの尼将軍』がある。
現住所　〒275 習志野市藤崎6-2-15

画家・**こさか しげる**（小坂 茂）

1925年東京生まれ。日本美術家連盟，春陽会，童美連会員。第21回小学館絵画賞受賞。作品に『星空のバイオリン』『七人めのいとこ』『やせっぽちのチア』『もも子島へ行く』等多数。絵本・挿画の他，グループ展等にも作品を発表している。佐久市立近代美術館に作品収蔵。
現住所　〒167 東京都杉並区下井草3-11-13

朝やけのランナー

第一章　スパイクをはいて

おてんば娘

東京から新幹線で四時間。岡山駅から車で十五分ほどのところにある岡山県営総合グラウンドの新緑は、初夏の日ざしをいっぱいにあびて輝いていました。

日曜日のお昼まえで、グラウンド内にある陸上競技場わきの路上は、ジョギングする人たちが行きかっています。若い中学生のグループから、犬をつれたおじいさんまで、赤い線の入ったランニングパンツ、青いトレーニングシャツ、それにまっ白いテニスウェアと思い思いの服装で、みんな楽しそうに走っています。

私（筆者）がさがしていた女子ランナーの銅像は、公園のすみの木立のかげに建ってい

ました。両手を高くかかげ、いまにもゴールのテープを切ろうとするところのようです。ユニフォームの胸のゼッケンは「265」。

台座には、『郷土の生んだ陸の女王　人見絹枝』ときざまれています。

人見絹枝――昭和のはじめ、走巾とびや百メートル、二百メートル競走などに次々と世界新記録をマークした女子陸上選手。

一九二八（昭和三）年、オランダのアムステルダムで開かれた第九回オリンピック大会では、八百メートルで二位に入り、銀メダルを獲得しました。

この大会の八百メートルでの絹枝とドイツのラトケ夫人とのデッドヒートはすさまじく、参加した選手全員がゴールの後、ばたばたと倒れたことから、〝死の激走〟として語りつたえられました。女子には八百メートルはむりだという理由で、その後、第十七回ローマ・オリンピック大会（一九六〇年）までオリンピック種目からのぞかれたほどです。

ゼッケン265は、このとき絹枝がつけた番号でした。

オリンピックの陸上競技で日本の女子選手がメダルを獲得したのは、あとにもさきにも絹枝たったひとり。人見絹枝は、日本が生んだ最大の陸上選手といってよいでしょう。

「人見絹枝は、ただ走るのが速かっただけではありません。女がスポーツをやるなどもっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てのほかと、白い目で見られた時代に、あえてそれに挑戦した勇気ある女性でした。そればかりでなく、新聞記者としても健筆をふるい、日本の女子スポーツをさかんにするため、わずか二十四年の短い一生をささげた人なのです。」

案内してくれた絹枝の母校、福浜小学校の教頭、津村先生の説明をききながら、私は、三メートルほどある絹枝の像を見あげました。その表情は苦しそうでもあり、また、路上を行きかうジョギングの人たちをやさしく見おろしているようにも思えました。

「短い人生を、どんなことを考えながら走りつづけたのだろう。」

そんなことを思いながら、グラウンドをあとにし、旭川ぞいに南へ車を走らせました。にぎやかな商店街をぬけると、やがて緑の水田が目にはいってきます。

目にしみるほどの、青あおとした田んぼの、ツンツンと空にむかってのびている稲。

「この備前平野が、絹枝のふるさとなんだ。」

水田風景に目をうばわれていると、二十分ほどで絹枝の故郷、今は岡山市内になっているかつての御津郡福浜村福成につきました。

絹枝が生まれたのは一九〇七（明治四十）年。日露戦争でロシアに勝って、日本が世界

にむけて国の力をのばそうとしている時代でした。父猪作と母岸江の次女。三歳年上の姉寿江と、祖母ぬいの五人家族です。ひろびろとした備前平野のなかにあるのんびりした村で、先祖代々米づくりにはげむ農家でした。

「このあたりも、すっかりかわってしまったんですよ。新しい家がたくさん建って。」

人見家をたずねると、寿江の長男の未亡人、鈴子さんが出むかえてくれました。

墨色のかわら屋根の大きな母屋、その前に、花を栽培するために建てたのでしょうか、大きなビニールハウスが三棟ならんでいます。母屋は絹枝が死んだ後、建てかえられたものです。中に入ると、仏だんのわきの書だなに、絹枝の写真がかかげられていました。

「五十年も前のことですから、絹枝のものはこれくらいしか残っていないんですよ。」

鈴子さんが奥からアルバムや、茶色くなった古い新聞につつんだ賞状、カップなどをもってきて、見せてくださいました。

「金や銀の大きなカップは、太平洋戦争のとき、ほとんど供出してしまいました。」

絹枝の勝ちとったたくさんの記念の品は、戦時中、国にさしだされ、武器などを作るための材料として溶かされてしまったのです。

「そんなに貴重なものまで……」

優勝カップや記念の品々は、絹枝の血と汗の結晶といってもいいすぎではありません。戦争の非情さを思い、ふくざつな気もちで、うす緑色のビロードの箱をあけると、三十個ちかいメダルがならんでいます。丸いもの、ほそ長い、だ円形のものなど、いろいろな形です。

『一九二八年　チャンピオンシップ　二二〇ヤード』

『一九二九年　第六回美吉野日本女子オリンピック』

メダルをひとつひとつうらがえしてみると、日本国内や海外での絹枝のたたかいのあとが、きざみこまれています。

『一九二六年　イエーテボリにて』

これは、スウェーデンで開かれた第二回万国女子オリンピックに出場し、個人優勝したときのお祝いにもらったものでしょう。『二百メートル　二十四秒七』ときざまれたスプーンは、一九二九（昭和四）年に世界新記録をだした記念です。直径十五センチほどの茶色くなった紙皿のよせ書きには、織田幹雄、南部忠平などの名前がみつかりました。アムステルダム・オリンピック大会にいっしょに参加した陸上選手たちのよせ書きです。

「小さいころは、よく、家のまわりの堀わりで水あそびしたものです。男の子でもなかな

かとべないのに、絹枝はポンポンとかるくむこう岸までとびこえて、みんなをおどろかせたそうですよ。」

絹枝の思い出話になると、おいにあたる文夫さんもくわわってきました。村はずれの田んぼへ行って、まわっている、水車のてっぺんまで、だれが一番のりをするかという、「天下とり」という遊びがはやったときには、いつも絹枝が一番で、ガキ大将たちをくやしがらせたといいます。

こんなわけで、いつしか「バッサイ絹枝」というあだ名がつきました。この地方のことばで、バッサイとは、おてんばという意味です。

家の前の小川をせき止めて魚をとるのが好きで、コイやフナなどをつかまえてもって帰ると、きまって、「女の子がそんな遊びをしてどうする。」と、お父さんにしかられました。

自然の中で、思いっきりとびまわっている子ども時代の絹枝が目にうかびます。

一九一三（大正二）年に、絹枝は小学校にすすみましたが、バッサイぶりはすこしもかわらなかったようです。絹枝は後に、自伝の中で、勉強より遊びまわるほうがずっと好きだった、と書いています。しかし、六年生のときの成績表を見ると、国語、歴史、地理、

理科、図画（図工）、唱歌（音楽）、体操（体育）などは「一等」、今でいえば「五」の優秀な成績です。ただ、算術（算数）だけは少々にがてで「二等」。夜のうすぐらいランプの下で、泣きべそをかきながら、お姉さんから分数の計算を教えてもらったりしました。

今、福浜小学校の校長室のかたすみにある本だなには、『人見絹枝文庫』の名札がかかっています。絹枝が生きているときに読んだスポーツ関係の本が、八十冊ほど集められています。その一冊をとりだしてページをめくってみると、あちこちに赤えんぴつや黒いインクで線を引いたり、こまかな字で書きこみがしてありました。新聞記者として活躍し、陸上競技の練習におわれる毎日の中で、いつも勉強しつづけていたことがわかります。生まれながらの努力家だったのでしょう。

さて、勉強のかいあって、一九二〇（大正九）年、絹枝は岡山高等女学校へ入学しました。入学試験は、競争率四倍という難関でした。

そのころは、義務教育は小学校だけ。卒業すると、男子は五年制の中学校へ、女子は高等女学校へ、また学校の先生になりたい人には師範学校へすすむ道が開かれていました。

その年、高等女学校へすすんだのは、村の小学校で絹枝ただひとり。女には学問などいらないというのが、村の人たちのふつうの考えかたでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com